

古高取通信

平成28年 7月

私たちは、活動の四本柱を基に、まちづくりに貢献することを目指します。

1. 活動の拠点を創る
2. 古高取の知識を深める
3. 古高取の魅力を伝える
4. 次世代へつなげる

古高取を伝える会会報

直方の高取焼



古高取

目次

平成二十八年度定期総会	2
古高取の魅力を伝える	2
窯元紹介	7
活動の記録	7
なんでも掲示板	8

「古高取の魅力」

小石原焼は、日本の陶芸界に大きく影響を与えたバーナード・リーチによって、「用の美の極致である」と大きく称賛され、民陶ブームを巻き起こしました。

一六八二年に、福岡藩三代藩主黒田光之が伊万里から陶工を招いて窯場を開いたのが始まりとされていて、主に生活雑器が焼かれています。高取焼の開祖、八山の孫、八郎も当地に移り住んで開窯していて、小石原焼に、高取焼が大きな影響を与えた事が推察されます。

これは、宅間、内ヶ磯、山田と、生活雑器を焼いてきた古高取の技法が引き継がれてきたことでしょう。

古高取の魅力は、「織部好み」や「遠州好み」に留まらず、「用の美」にもあるのではないのでしょうか。

隅田知明

平成二十八年度 定期総会

平成二十八年度五月二十一日(土) 直方市中央公民館三階

第二学習室

記念講演・石原祥嗣氏
「陶工として生きる」

平成二十八年度の定期総会は、活動経過報告、決算報告、活動計画(案)、予算(案)について滞りなく承認いただきました。

また来賓の壬生直方市長は、直方の文化活動を支える当会の活動に共感の意を伝えられました。今年度も活動の四本柱(一)、活



動の拠点を創る。二、古高取の知識を深める。三、古高取の魅力伝える。四、次世代へつなげる)に基づき活動し、諸団体とも協議して、活動の拠点創りに向けて努力したいと思えます。

古高取の魅力伝える

陶芸家の石原祥嗣さんをお迎えして

副島 邦弘

平成二十八年度定期総会の記念講演を日本工芸会正会員で、宮若市に窯を持たれている陶芸家石原祥嗣氏をお迎えして『陶工として生きる』というテーマでお願いした。

石原氏の出生地は直方で、昭和十八年に生まれ、当地の高校卒業後、金沢美術工芸大学彫刻科を昭和四十三年に卒業され、一時民間のデザイン会社に勤められた。その後直方市に戻られ、やきもの「の造形美に目ざめられた。前衛的な造形でその作品を福岡県展や日本現代工芸展に出品され入選等を



された。作品の買上げは外務省・国際交流基金等があり、平成十一年に現在地の宮若市下有木に窯を移されている。移動の理由は周辺部が住宅地になったため薪が焚けなくなったためであった。

講演の主題は、先生の陶芸生活三十五年を振り返ってもらい、節目節目の作品八点を持って説明を付加していただいた。(番号は時系列で①古く⑧最近のもの)
大学時代は彫刻科に籍を置いていたため、石刻・木刻が中心で素材の変化というものは見られず、技術は彫りと刻むことを通して作品としたものであった。それに比べて陶芸は、粘土を焼くことによって石化することによって造形美を得られることが現在に繋がっていった。当初は上野の高鶴元氏や能間瀧次氏らにお世話になり、高鶴氏にやきもののイロハや焼成技術を教わり、素材の面白さや焼成変化等で作品の深さがあった。上野の渡氏達と筑陶会を組織して伝統工芸と現代工芸とを繋ぐ作品を究めることに努められた。

① 中型鉢形陶器

韓国の鶏籠山の李朝白磁と美濃の中世の山茶碗のすなおな形

と白化粧を写したいと思つて写作品にした。口唇部から黒味帯釉で内面まで施した。素焼きに基本釉の白釉を器面内外に塗布して、その上に黒味帯釉を二重掛けにしたものである。内面には文様を彫つたもの。

② 高台付中型皿形陶

内面の色調はベニ赤で、外面は黒色で、高台が土味となっている。素焼きに黒漆を内外に塗り、高台だけ素焼きが残り、内面に朱赤の根来塗様式を呈している。

③ 灰釉大皿

内面に文様が描かれ、色調は緑味帯びた灰色を呈し、外面は黄味を帯びた灰黄色をうすく呈す。厚味をもつて重い感じである。釉は灰釉で、平底である。

④ 朧泥彩

日本工芸展奨励賞をもらった作品で、装飾古墳の壁画をイメージしながら展開したもので、高さ五十 cm 前後、幅四十 cm 前後で重量感を持たせながら、釉膜を剥いで岩絵具を染み込ませながら紫黒色の前衛的な花器風のオブジェとなっている。



⑤ 箱形金銀彩

絹本を風化させたものをイメージして箱形物を素焼きして、下地に金彩を上地に銀彩を菱形を格子目状に、身も蓋の表裏とされていると見える大形の物である。

⑥ 合子形金銀彩

大形の物で、全体の姿は金色呈している。アクセントとして黒の漆と銀彩を入れている。下地は金で中地は黒漆と上地は銀彩で三色でまとめ、蓋の内面は白地に白銀のサクラ文様を鏤めている。身の内面は白銀の下地

に銀彩を縦長の菱形を楕圓形状に並べているもので、内面には黒は入っていない。趣き深いもので、合子の中は一種特別な空間で浄土を醸し出している。江戸時代の琳派様式と思われる。

⑦ 金彩細口大壺

大形の作品で重量感もある壺形陶器で、所謂直弧文をイメージとしてまとめられたもので、下地に白と黒味がかつた茶漆と中地に金彩の円形を中心とする連結文を五〆六配置し、その縁取りと円形連結文の中央に一線の茶黒の線を入れてアクセントとしているもので安定感を持っている。

⑧ 銀彩大壺

大形の作品で、丸底で尻膨味で安定感がある、表面には直弧文に円形連結文が、白銀と銀彩を入れ、その円形文には小さな菱形文を組み合わせて配置している。一風の墨絵風を呈し、全体が黒味がかった利休ねずみを醸し出しているものである。

①〜③までが十五年の作陶技法で④〜⑥が次の十年、⑦〜⑧の作品が次の十年で、作品の変化がみ



られ技術的な進化と伝統工芸と現代工芸をつなぐ作品であった。

石原氏は、焼物が「チョット好きなのはだめで、大好きでないと、そして何よりも継続していくことが大切で、弟子入志願の人には、「チョットヤソットでは喰えない」と教えている。女房にはそれなりの苦勞をかけたと話しの中で述べられまとめられた。

なお、作品についての感想については筆者の感じをそのまま記述したもので、石原氏が述べられたものではないことを記する。

中央公民館郷土資料室に展示している古高取

直方市教育委員会文化・スポーツ推進課
無津呂 健太郎

直方市中央公民館の郷土資料室には、多数の古高取の出土品を展示しています。これらの出土品は、直方市教育委員会が昭和五十四～五十六年に実施した内ヶ磯窯跡、および昭和五十七年に実施した永満寺宅間窯跡の発掘調査で出土したものです。

資料室に入って右側や、突き当



直方中央公民館二階 郷土資料室

りの壁沿いの展示ケース、そして通路に展示している四つの展示ケースの大半は、高取焼関連の遺物を展示しています。

高取焼は、黒田長政が文禄・慶長の役の際に朝鮮半島から連れ帰った陶工八山に命じて製作させたのが始まりで、鷹取山麓に最初の窯を開かせます。これが永満寺宅間窯跡で高取焼発祥の窯です。宅間窯跡の遺物は、弥生土器の左手側と須恵器の前のケースに展示しています。破片資料がほとんどですが、碗、皿、播鉢が多くみつかっており、ナマコ色(青白い色)に発色した釉薬のかかった陶器が特徴的で、朝鮮半島の李朝時代の作風を色濃く残しています。宅間窯跡は小規模な窯跡である上に、後世の盗掘が著しかったため次の内ヶ磯窯跡に比べると遺物量がかなり少なく、全容を知ることができないのが惜しまれます。

高取焼の生産地は、慶長十九年(二六一四)、宅間から北へ三キロほど離れた頓野にある内ヶ磯窯へ移ります。全長四十六・五m、十四室に及ぶ大規模な登り窯が発掘調査されており、碗、皿、播鉢、甕、瓶などの日用雑器のほかに、茶碗、茶入、水指、結文向付などの茶器や茶会席器も出土しています。入



口を入れて右側の大きな展示ケース、通路にある展示ケースには主に日用雑器を展示しています。通路にあるケースには、かつて唐津と言われていた鉄絵を施した皿や碗、萩焼と思われる透文の鉢の破片、上野焼と考えられていた銅緑釉をかけた陶片など陶磁史の歴史を書き換えた貴重な資料が並んでいます。このほか、備前焼の影響を受けた播鉢など、興味深い資料が多くみられます。

入口を入れて正面左側と、資料室の最も奥の鷹取城出土瓦の右側には、水指、茶碗などの茶器が展

示しています。このうち茶入は中国産のものを真似たいわゆる「唐物写し」と呼ばれるものです。これらの茶入は、小堀遠州好みの瀟洒な作りになっています。一方、茶碗などの中には、わざと形をゆがませた杓形茶碗もあります。これは遠州以前に徳川家の茶道指南役として活躍した茶人古田織部の好みを反映したものです。特に掛け分けの杓形茶碗は、岐阜県土岐市の元屋敷窯等で焼かれた美濃産のものとは形状が非常に似通っているだけでなく、斑唐津と呼ばれた多くの伝世品が内ヶ磯産であることを証明した貴重なものです。内ヶ磯窯跡の出土陶器は、多彩な技法が試されるとともに、豪放な織部好みから瀟洒な遠州好みへの変化を感じることでできる非常に面白い資料群と言えます。

谷尾美術館別館(アトスペース谷尾)にも貴重な高取焼の出土品を展示していますが、こちらのご紹介は、また後日に行いたいと思います。



小笠原流と田香焼

古高取を伝える会会員 吉野 繁則

新聞で見た「戦国武将と茶の湯」というタイトルに呼び寄せられ、昨年九月二十五日から、夫婦共々「古高取を伝える会」に参加させて頂いております。いつも学習会や講演会では良い勉強になり触発されています。また今年三月には、皆さんと一緒に唐津窯元を訪ねて唐津名護屋城跡まで見学できまして楽しい一日でした。

さて、私は三十数年「小笠原流茶道」を続けています。小笠原流



(古市流)を若干紹介させて戴きます。応仁の乱の頃、奈良郊外の土豪で古市一族の古市胤栄・澄胤が、茶祖と言われる茶人「村田珠光」に弟子入りします。胤栄は淋間茶会で知られています。古市流初代が胤栄で二代が澄胤(播磨律師)、澄胤は珠光一番弟子と言われています。

珠光から澄胤に送られた「心の文」は有名です。華美な会所、闘茶といった遊びに戻らぬよう愛弟子を導こうとする内容です。「お尋ねの文」という書も残っています。ところが戦国時代の荒波の中、澄胤は戦で敗走しその途中で自害しました。

その後、孫の勝元(了和)が小笠原忠真公に召し抱えられた事により、古市流を小笠原流と改名し明治に到るまで、代々小笠原家茶頭をしていました。忠真公が上野焼を育成されたのは、ご周知のとおりです。

時代を下ります文政頃から幕末の頃の小笠原流十一代古市宗理(自得齋)は、中興の人で茶道・書画に優れ流儀の隆盛を図り、香春に「田香焼(明治二十年廃窯)」の窯を開くなど上野焼を指導したとあります。その「田香焼」の窯跡は、田川郡大任町と香春町高野にあり

ます。

今、個人誌『一期一会』(不定期発行)に「田香焼」をレポートする資料収集の端緒についたばかりです。何か情報がありましたらご教示戴ければ幸いです。では、皆様これからも夫婦共々宜しくお願ひ申し上げます。

茶入雑考(二)

古高取を伝える会会員 副島 邦弘

『山上宗二記』の中で三肩衝の茶入として、初花肩衝・新田肩衝そして檜柴肩衝の名が上がっている。

この地域で名高い檜柴の肩衝について考えてみたい。

檜柴肩衝 大名物 漢作肩衝茶入 名前の由来は『万葉集』の 御狩する 狩場の小野の 檜柴の 汝はまさらず

恋こそまされ(1213048) から命銘されている。

伝来は足利義政(不明)・博多の島井宗室(秋月種実(降伏の証と



足利義政

して秀吉へ献上)・豊臣秀吉・徳川家康・秀忠(徳川家伝来)・明暦三年(一六五七)の振袖火事によって江戸城火災となり破損し、修復され、行方不明。

このような伝来がある。その中でも、この茶入が島井宗室のもとに所持されていた時、豊後の大友宗麟から何度も高額で譲ってほしいと所望されたが、これを断り続けた。

しかしながら、筑前秋月古所山城主の秋月種実に博多町を焼き払うぞと脅迫に近い形で譲るこ

ととなり、この時島井宗室は茶室も壊し、その後茶の湯を控えることとなった。

秋月種実は、島井から強引に手に入れたこの茶入を、秀吉の九州征伐の際に、娘を人質とともに檜柴肩衝・国俊の太刀を秀吉に献上し降伏した。この檜柴肩衝によって許され命拾いしたという逸話が残っている。秋月氏は秀吉軍の先方として島津氏に充てられ、嫡男種長が日向高鍋に所領を移封され、明治維新まで、大名として残った。これも檜柴の茶入のおかげである。と甘木の秋月町では今も伝承されている。

檜柴の茶入とは、どんな形状の

ものであったかを知る手だては、博多商人であった神屋宗湛の『宗湛日記』の中に図入で記録されている。

文禄三年(一五九四)三月廿九日
一 大和中納言様(註) 御会 宗湛

一人

長四疊 ヨガミ柱 櫻木也

スミフリニツリ棚ニモノナシ

床ニ虚堂ノ文字懸テ、前ニ

ナラ柴 袋ニ入、四方盆スヘ

テ、

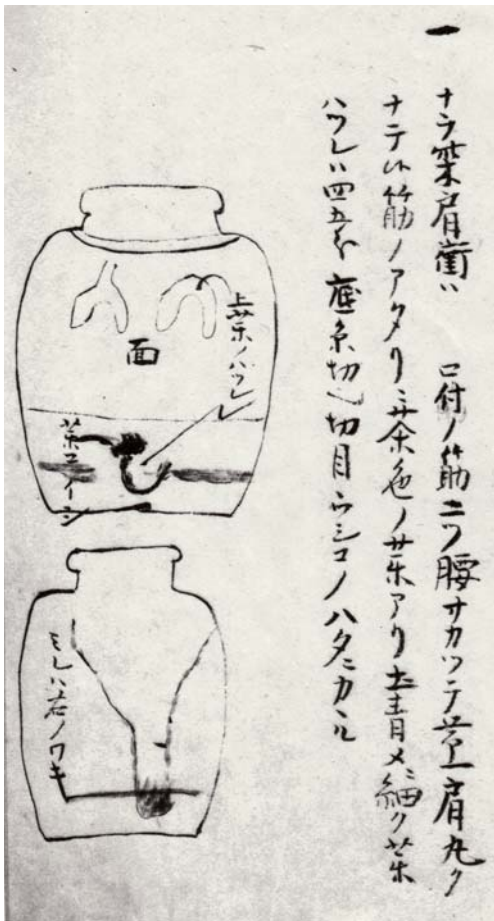
床ノマン中ニ置テ、風爐ア

ラレ釜古 水指、真蓋 メン

ツウ(註)

高麗茶碗ニ道具仕入テ、土

ノ水覆



一 ナラ柴肩衝ハ、口付ノ筋ニフ腰サカツテ茶上肩丸ク
ナテハ竹筋ノアタリニ赤糸ノサネアリホトメ細クモ
ハツレハ四ツテ底糸切切目ウシコノハタカカレ

手水ノ間ニ、床ノ文字ヲ取テ、肩衝袋又カセテ盆ニ置、ツリ棚ニ茶碗置、

メンツウ被ニ持出一、御立候也、中納言様御手前也

(中略)

一、ナラ柴肩衝ハ、口付ノ筋ニ

ツ腰サガツテ帯一、肩丸ク

ナデ候、筋ノアタリニ茶色

ノ薬アリ、土青メニ細ク薬

ハツレハ四五分 底糸切也、

切目ウシロコノハダニカトル、

図アリ(茶入)

(後略)

図に示したような形状をなしているもので寸法の記述が雑であるが、大きさは初花や新田の肩衝のように器高八、五c.m前後で、口径が四、五c.m前後の小振のもので、重さが百三十グラム前後のものであったと推測される。秀吉は三肩衝を所持して比べていたと考えられ、利休も水屋の茶道具置場で扱っていたと考えられる。

(註一) 豊臣秀長の養子。関白秀次の弟。

天正十九年 秀長が死去し相続

し、文禄元年 大和中納言とよ

ばれる。文禄三年二月 吉野花

見に奔走したが、四月十六日

吉野十津川に遊び入水溺死。継嗣なく断絶し收公される。

(註二) 面桶(曲建水) 赤杉材を材料とする曲物建水。利休が茶室で使用した。

引用・参考文献

『神屋宗湛日記』西日本文化協会

一九八四年

『原色茶道大辞典』淡交社

二〇〇六年二十版

『戦国人名辞典』吉川弘文館

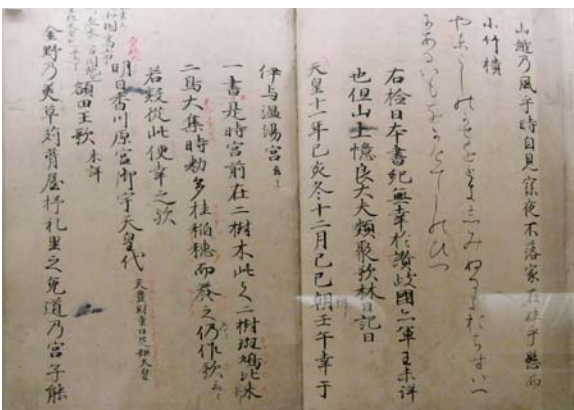
一九八一年

『茶道全集』創元社復刻本

一九七七年 茶会記記録など

『万葉集』塙書房

一九六三年



万葉集

窯元紹介

筑前感田焼 藤原窯 藤原 勝夫

元来九州の陶器は、その殆どが朝鮮の役によって連れ帰った陶工の技法をうけつぎ今日に至っておりますが、感田焼もその流れを汲むものであります。

感田焼の特色は、胎土に粘力があり腰の強い可塑性をもつために配合、土こね、削り仕上げ等長期間にわたる体験をもち、素焼施



釉は独特の灰釉銹釉を用いて素朴な味わいを出しております。

一生懸命作陶に精進を傾けて居ります。

何卒、御叱御愛護下さいますようお願い申し上げます。

藤原窯は、現在の地に窯を開いて四十六年。現在、二代目の藤原勝夫さんが後を継いで十一年になるそうです。

昔ながらの技術と斬新な発想で全国的に見ても珍しい”陶器でできた回り灯籠“など積極的に制作されています。

お伺いした際、格子や花などの文様が施された灯籠を拝見し、幻想的な雰囲気も楽しませていただきました。ありがとうございます。

また焼物教室も開催されているとのことでしたので、興味のある人は、是非、お問合せください。

筑前感田焼 藤原窯 藤原 勝夫

〒八二二一〇〇〇一

直方市感田二二六四〇

電話〇九四九二二六六六六

活動の記録

●子供焼物教室

（平成二十八年六月十日～二十五日）
場所：直方市内の小学校

本年は、十一月に筑豊美術協会七十周年記念の展示会が、直方市中央公民館で開催され、六年生の作った茶わんが展示されます。

そのため六月中に十校の焼物教室を行うという、ハードなスケジュールの中で、何とか焼物教室を終えることができました。

毎年のことながら、子供たちの焼きものに対する意欲、好奇心には驚かされるばかりですが、本年は特に、今までにない多くの質問攻めにあい、会員一同うれしい悲鳴と共に、改めて古高取焼の魅力を再認識し、初心に戻るべき、きっかけを与えられたことに感謝、感激です。

「直方の宝物である古高取焼を守っていきましょう」という言葉をお子供たちから聞いたことや、土と無心に向き合う子供たちの姿を見てみると、この古高取焼という伝統が確実に受け継がれている事を実感しました。



四百数年前、土を素材に、釉薬をうまく使いこなし、炎を試行錯誤しながら器づくりをつづけた陶工の気持ちを考えながら、子供たちはそれぞれ作陶の時間を楽しんでいました。

土に触れることがスタートです。釉薬を扱うことも、火を燃やして茶わん焼くことも、残念ながら子供たちは体験することはできませんが、想像の世界で大きく広がったようです。

心をこめて作ったものには、本物の美しさが自然と備わってくるものです。そうして、その美しさは長い時を経て変わることがな

いことを古高取焼が証明している
ことも子供達には理解できたもの
と思います。

自分たちの作った茶わんの美し
さを、大人になってから変わるこ
となく実感する日がきつとありま
すよ。と子供たちに伝えることが
できた、楽しい焼きもの教室でし
た。

柴田ムツ子

実施日程は、左記の通りです。

六月十日(金) 植木小学校

六月十七日(金) 直方西小学校

下境小学校



六月十八日(土)

直方東小学校

六月十九日(日)

直方北小学校

六月二十四日(金)

上頓野小学校

六月二十五日(土)

感田小学校

九月二十一日(水)

福地小学校

九月二十一日(水)

中泉小学校

九月二十一日(水)

新入小学校

●学習部会

平成二十八年七月〜十月

時間：十時三十分〜十二時

※今年時間帯を変更しました。

場所：えみくる(直方市中央公民館横)

今年度の学習部会は、茶書・記
に見える道具立(一)

『信長茶会記』を繙きながら「織
田信長と茶湯」を中心に講義四回
とまとめ講演、その他、現地視察
を行う予定です。

〔学習部会〕のお知らせ

第一回：七月二十三日(土)

『信長茶会記』とは

第二回：九月二十四日(土)

信長と茶湯(信長公記から)

第三回：十月二十二日(土)

信長と利休の茶

第四回：十一月二十六日(土)

信長から秀吉の茶

まとめ講座は、十二月上旬に、
現地視察は、来年三月下旬に予定
しています。

なんでも掲示板

●熊本復興支援チャリティ展示販売

平成二十八年七月五日(火)

時間：九時〜十二時

場所：殿町商店街内(五日市)

七月五日の五日市に合わせて、

明治町商店街にて『古高取を伝える
会』で、熊本地震で被災した熊
本城の修復を支援しようと臥瀧庵
焼物教室の先生と生徒の作品展示
・販売を開催しました。

当日は非常に暑い中、朝早くか
ら通りすがりの買い物が、気に
入った焼き物を求めて集まってい
ただきました。

花入れやコーヒークップ・ビー
ルカップなどが瞬く間に売れてし
まいました。中には家に陶器は沢
山あるけど復興支援ならば是非一
つと買って下さる方もあり、この
企画が買い物客に喜んでいただけ
たのが印象的でした。

また八月の五日市にも開催しま
すので、多くの人に立ち寄ってい



ただきたいと思えます。そして、
少しでも多くの金額を熊本城修復
の為に送れるよう願っています。

向野 志津絵

●金剛山もととり協議会

平成二十八年六月十日(金)

七月三日(日)

場所：金剛山もととり広場

本年も、六月十日(金)から七月
三日(日)まで、「あじさい鑑賞会」
を実施し、多くの方の来園で山も
大賑わいでした。

末松 登志子



お客様の感想を少し掲載させて頂きます。

~~~~~  
 毎年楽しみに「あじさいの花」を見させて頂いています。

私だけでは勿体なくて友人を連れて六回登って来ました。花株も増えて、そのご苦労は大変なものだと思いますが、皆さん喜んでます。

近場でこんなに美しい所はなかなか無くて、本当に嬉しい限りです。ありがとうございます。又来年も参ります。



子供焼物教室の感想文をいただきましたので、少しだけ紹介させていただきます。ページと発行日の関係で、ほんの一部になり申し訳ございません。



土曜日は、高取焼をおしえてくださって、ありがとうございます。私は高取焼を作ったことがありません。1つ目は、最初の穴をあけるときに深さをちょうせいすることです。始めのほうは、浅くて、苦戦していました。でも古高取を伝える会の人たちがどのくらい深さをおしえてくださって、おどろい深さになりました。2つ目は、上にあけるのです。やがれないうちにちょうにしていきました。いいうておは、きれいなものができてよかったです。最後に焼きあげてあげてくださって、ありがとうございます。おかげで、楽しいお茶会になりました。

6年 2組 箭 八谷 杏萌

直方東小学校六年二組 八谷 杏萌



ぼくは、授業さんかんで古高取を作るのを体験して思ったことがあります。それは、とてもむずかしかったです。スタッフが手本をやっているのを見て自分でもかんとんにできると思ったけど、作っているところだいがつぶれたり、お皿みたいにならな、とてもむずかしかったです。それ古高取について勉強すると昔から今までの文化が売っているのがびっくりしました。本当にありがとうございました。

6年 2組 箭 中原 勇人

直方東小学校六年二組 中原 勇人

子供焼物教室の感想文をいただきましたので、少しだけ紹介させていただきます。前ページの続き。



私は、高取焼が、何百年前につくられていたことを知っておどろきました。  
 実際に高取焼をつくってみるとむかしが、たけな、楽しいところもいろいろあり  
 ました。そして、高取焼をつくった日がたん生日というすごい行事な  
 ことで、私は、一年に一度のたん生日に高取焼がつくられたのでうれしかったです。  
 そして、何百年前の高取焼を見たとき私は、何百年前のものを見ら  
 れてびっくりおどろきました。ボランティアで高取焼をおし  
 下さった、いろんな学校にいらして下さりして下さり、私にこの直方  
 東小学校に来て下さったことにもとても感謝しています。  
 そして、昔のこともよめからた、高取焼の味とやたのしさが分かるので、  
 この高取焼で学んだことはおもしろいと思います。

六年 組 名前 渡邊 琉那

直方東小学校六年一組 渡邊 琉那

「古高取」の魅力を発信するためのイベント情報など募集しています。事務局までご連絡ください。

〈編集後記〉

梅雨も終わり、いよいよ暑くなってきました。  
 季節の変わり目なのか、年齢によるものか、不摂生でしょうか、私は風邪を引いてしまいました。  
 仕事から身体が資本のようなものですので、健康には十分に注意しなければなりませんので、本当に失敗です。  
 これから益々暑くなってきました。皆様もどうぞ健康に注意して、夏を乗り切ってください。  
 今後ともご指導・ご鞭撻の程何卒、宜しくお願い致します。

「古高取通信」会報・NO 23

〈発行〉 古高取を伝える会

〈発行日〉 平成二十八年七月二十九日

〈現在の会員数〉

- 正会員 五十四名(五十四日)
- 賛助会員 十八名(二十七日)
- 団体 一団体(二日)

〈マイ茶碗の数〉 五千二百七十一個

〈事務局〉

〒八二二一〇〇二六  
 福岡県直方市津田町七十四  
 TEL 〇九四九(三三)一三二一